

【医療経営特集】

医療経営の革新と質の向上をめざして（４）

国民医療費が、国内総生産や国民所得を上回るペースで増大する傾向にあり、平成23年度には38兆円を超え、40兆円を超える日が近づいてきている。また、厚生労働省によると、2005年に比較して2010年に就業者人口が増加したのは、医療・福祉と情報通信業のみであり、さらに就業者総数は約5,961万人の中で、医療・福祉は、総数の10.3%を占めている。

これまでは、これだけの市場に対して、経済学も経営学も正面から研究対象として取り組むことが多くなく、一部の研究者たちによって研究が継続されてきた。しかしながら、最近では、市場が大きくなり、経済産業省なども政策の重点を医療や福祉に移すようになってきたことで、医療領域に新規参入研究者たちが増えてきた。この現象は、医療経営に関する多角的な研究がなされるということでは大変良いことではあるが、一方、理論だけを振り回す、現場を知らない研究者群によってチェリーピッキングされることも目についてきた。

このような環境下で、日本大学商学部を中心とした様々な領域の研究者によって、医療経営をキーワードにして真摯に医療を研究対象とする論文の執筆を依頼し、ここに刊行することができた。

今回は合計4本の研究成果を示すことができた。まず論文として2本掲載した。外島裕教授・時田学准教授による病院の組織風土を心理学的なアプローチによって、多角的に調査し、病院職員の意識を分析した論文である。もう一本は、本学医学部の高橋昌里小児科学主任教授による、大学病院経営で、大きな課題であるガバナンスについて正面から取り扱った意欲的な論文である。次の2本は研究ノートである。最初が、青木准教授の科研費基盤Bでの共同研究による国際調査に関しての研究ノートであり、ついで宇田准教授の関係性の質に関して経営と臨床を結び付けようとした研究ノートである。このように今回は、医療経営に関する現実的な課題に対する研究から3本、理論研究として1本を掲載した。次回は、次々号に、経営戦略および医療情報に基盤を置いた論文を掲載して、特集を締めくくりたい。

これらの一連の研究が、わが国の医療経営で、現実問題の解決に少しでも寄与することを願っている。

医療経営特集 責任者
教授 高橋淑郎

